

次回展のご案内

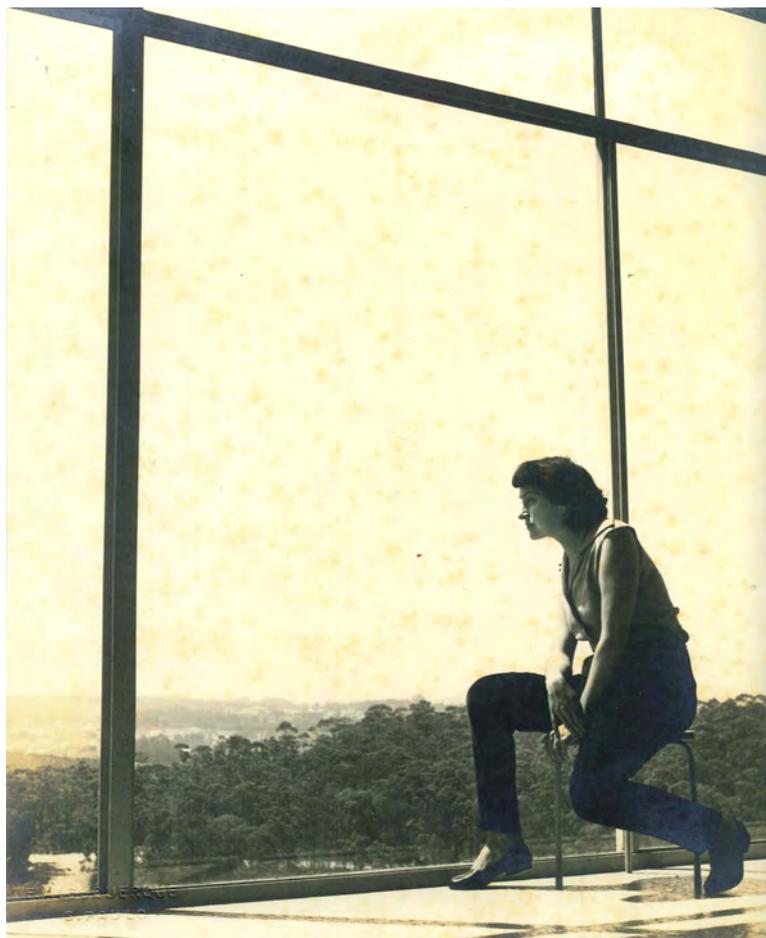
WATARI-UM
The Watari Museum of Contemporary Art



ブラジルが最も愛した建築家

リナ・ボ・バルディ展

2015年12月4日[金] - 2016年3月27日[日]



主催：ワタリウム美術館
助成：駐日ブラジル大使館、ブラジル文化省
協力：リナ・ボ & P.M.バルディ協会(サンパウロ)

監修：妹島和世
会場デザイン：周防貴之
グラフィックデザイン：グルーヴィジョンズ

休館日：月曜日[12/7, 12/14, 21, 28, 1/11と3/21は開館] 12/31-1/4は休館
開館時間：11時より19時まで [毎週水曜日は21時まで延長]
入館料：大人 1000円 / 学生[25歳以下] 800円 / 小・中学生 500円 / 70歳以上の方 700円
ペア券：大人 2人 1600円 / 学生 2人 1200円

会場：ワタリウム美術館

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 3-7-6

Tel:03-3402-3001 Fax:03-3405-7714 official@watarium.co.jp <http://www.watarium.co.jp>



Ministério da
Cultura



第2次世界大戦直後の1946年、ローマ生まれのイタリア人、リナ・ボ・バルディ（1914-1992）は夫とともにブラジルへ渡りました。

巨大都市サンパウロのランドマークとして存在しつづける「サンパウロ美術館（通称MASP 1968年）」。4本の赤い柱と2本の大きな梁が展示空間を持ち上げたこの建築は、地上に市民のための広場を登場させました。ダイナミックで大胆な構造、近代建築に南米のおおらかな人間性を統合した彼女のユニークなデザインは世界中から注目を集めています。

そして彼女のもう一つの重要な建築に、市民の文化センターとして愛される「SESC ポンペイア（1986年）」があります。ブラジルという複雑な多民族、社会階層が混在する国において、市民にとって真に必要で開かれた場所を誕生させました。

本展は、日本での初のリナ・ボ・バルディの大掛かりな展覧会となります。

リナ・ボ・バルディはいわゆるエリート建築家ではなく、その人生は平坦ではありませんでした。戦争に翻弄されたイタリア時代、異国ブラジルで建築家としてのキャリアのスタート、教育者となった時代、そしてブラジルのフォークロアに遭遇し、独自の視点と会場デザインで行った工芸品の展覧会。さらに後年、都市計画のための新しいアイデアを次々と提案します。

人間性と力強さ、愛溢れるユニークな彼女の作品を通し、今あらたに、建築の力を考えたいと思います。



(1) ガラスの家 Casa de Vidoro 1951

彼女の最初の作品であり夫妻の自邸でもある「ガラスの家(カーザ・デ・ビドロ)」は、1951年、リナ・ポ・バルディが36歳のときに建設されました。見晴らし側が完全にガラスで覆われたファサードと、山に向かった伝統的デザインの居住部分に、彼女の作品の特徴のひとつ、現代建築と土着的建築の融合が見事に現れています。内装や家具もすべて彼女のデザイン。中心にある中庭と建物を構成的に一緒にすることで、彼女は自然と一体化した建築を実現させました。生活空間は流れるように設計され、中庭によって緩やかに分けられています。

自邸建設の同年リナはブラジル国民となり、ブラジルで生きることを選びます。そして、1992年に亡くなるまで、生涯をこの自邸で過ごしました。



ガラススタイルの床の再生

リナ・ポ・バルディの民芸品コレクション

1958年にリナはブラジル北東部の地域、バイアアを訪れます。黒人と混血の人々が住民の大半を占め、彼ら民衆のエネルギーに溢れた、文化的に重要な地域です。そこでリナは民衆の工芸品に出会い、その美しさに魅了され、バイアア州のサルヴァドール現代美術館の館長として、工芸品の価値を世に広く伝えることに熱中しました。



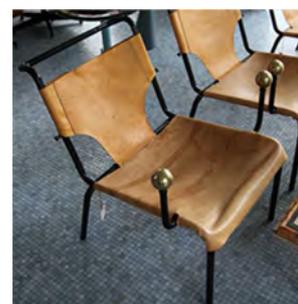
そこでのねらいは住宅を自然の中に置くことでした。建物に対するありがちな「保護」をいろいろ考えることはせず、あえて「危険」に晒すということでした。

リナ・ポ・バルディ 1953年

リナ・ポ・バルディがデザインした家具



「ボウルチェア」



(2) サンパウロ美術館 Museu de Arte de São Paulo 1957-1968

サンパウロ美術館は2つの棟に分かれていて、1つは市民ホールやオーディトリウムを持つパウリスタ通りの下の基壇部分、もう一つが地上にある、巨大な支柱がガラスの箱を浮かせているような、モニュメンタルな建築です。

支柱が建物を持ち上げて浮かせることで、通りにつながる1階部分は「ベルヴェデーレ(望楼)」という名のオープンスペースとなり、リナはサンパウロを一望できるこの場所を屋外展示や市民の活動のための場所としました。美術館は「知の霊廟」ではなく、活き活きとした教育的な場所であるべきという考えのもと、あらゆるアートや市民に開かれた場所として設計したのです。サンパウロ美術館はパウリスタ通りのランドマークとしてだけでなく、世界で最も人の訪れる美術館のひとつとして、サンパウロにおける重要な場所となっています。



リナ・ボ・バルディのインタビュー映像

街というのは公共の場であり、
すばらしい展示会の場、美術館となり、
開かれた本のように多くの情報を見せています。 リナ・ボ・バルディ 1951年

記憶のための場所？それとも有名なミイラを納める墓？人類の遺産をしまっておくための倉庫？それはもともと人が人のためにつくっていたものだったけれど、すっかり時代遅れになっていて、ため息まじりに扱われるようになった…そんなものを保管するための場所？いいえ、そうではないのです。これからの博物館は、扉を開け放ち、フレッシュな空気と光を採り入れるべきなのです。 リナ・ボ・バルディ 1953年



(3) SESC ポンペイア、カルチャー & スポーツセンター SESC Pompeia 1977-1986

SESC ポンペイアは、サンパウロのポンペイアにある労働階級地区にある廃業した工場を公共のスポーツ文化センターに改装するという、リナ最大のプロジェクトです。

リナは改装において最小限のものを付加するにとどめました。彼女は既存の工場を修復・改装し、図書館、展示スペース、レストラン、劇場、工場を含んだ公共スペースとしての大きなホールを新たにデザインしました。リナは〈貧しい建築〉という言葉によって、単純かつ質素でありながら、威厳を持ち、生活、関係、状況を豊かにする建築を目指しました。

リナは新たに運動場と更衣室の入った2つのタワー「シダデラ」と煙突をデザインしました。タワーは向かい合わせになって橋でつながっており、雲の形をした窓は洞窟のようなただの「穴」で、常時の通風を可能にしています。煙突は貯水塔として機能し、今日も毎日何千人ものサンパウロ市民が利用し続けているこの新しいカルチャー・ファクトリーの象徴となっています。ブラジルの民衆への関心を常に抱き続けた、彼女ならではのプロジェクトでしょう。



破れた屋根から落ちてくる雨にもかまわず、
子供たちは駆け回り、若者たちはサッカーを楽しんでいます。
水たまりに入ったボールを蹴りながら笑っています。
この幸せをこのまま、すべてはここにあり続けなければならない。私はそう思いました。
リナ・ボ・バルディ 1986年



(4) サンタ・マリア・ドス・アンジョス教会 Capela Santa Maria dos Anjos 1978

サンパウロ郊外の住宅地、半田園的な地域に建つ聖母マリア崇拝のための聖堂で、チャリティー協会の一員から依頼されたこのプロジェクトは建設資金がかなり限られていました。リナはここで < 貧しい建築 > という言葉によって、シンプルな素材と最小限まで抑えられたデザインによる質素な建築を考えました。外壁は砂とコンクリート、そしてこの地でとれた粘土を混ぜたしっくい塗られ、素朴かつ特徴的な赤色を見せています。幾何学的なプラン、植物、屋上庭園、自然との関係性、草屋根など、20年前のカサ・シレールと多くの共通点を持つこの作品は、単純な幾何学と合理主義的形態、ミニマリスト的ディテールや自然主義的なスタイルが組み合わせられ、リナの道徳的・美的思想がみごとに表れています。



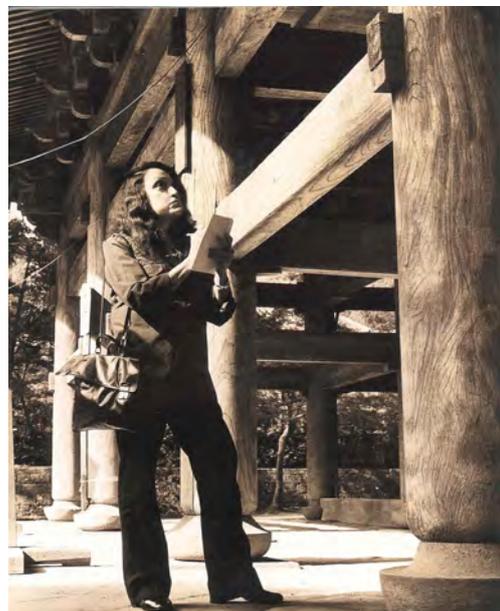
(5) ベニンの家

Casa do Benin 1987-1988

ブラジルの北東で過ごした5年間の経験を最大限に活かしました。それは、あたりまえの経験をする事でした。それは民俗的なロマンティズムに酔うことではなくて、シンプルにしてみるという実験でした。 リナ・ポ・バルディ



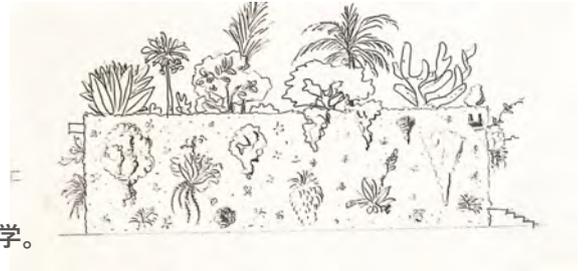
(6) 日本とリナ・ポ・バルディ



リナ・ポ・バルディ、日本にて

(7) 略歴

- 1914 ローマにて誕生。
- 1934 ローマの美術高校を卒業、ローマ大学建築学部に入學。
- 1940 ローマ大学を卒業後ミラノに移り、ジオ・ポンティのもとでインテリアデザインから都市プロジェクト、そして雑誌の記事やイラストの仕事に取り組む。
- 1946 美術評論家でディーラーのピエトロ・マリア・バルディと結婚、戦争で傷ついたイタリアを離れ、ブラジル・リオデジャネイロに移る。
- 1947 サンパウロへ移り、ピエトロが館長となったサンパウロ美術館がオープン。
- 1948 インダストリアル・デザイン会社のダルテ・パルマを設立。
- 1951 初めての建築作品であり自邸、カーザ・デ・ビドロ（ガラスの家）が完成。同年ブラジル国民となる。
- 1959 ブラジル東北部の文化的に重要な地域、バイーア現代美術館の館長となる。多くの前衛芸術家らと知り合い、彼らの演劇の舞台美術や衣装のデザインを行う。
- 1963 植民地時代の古い複合建築をリノベーションし、バイーア現代美術館に工芸の研究施設・工房・インダストリアルアートの学校を加えたソラル・デ・ウニャオンを建設。バイーアの工芸品に魅了され、その魅力を広く伝える。
- 1968 サンパウロ美術館 (MASP) が完成。アートと工芸をテーマに、リナ自身も様々な展覧会を企画。
- 1977 最大のプロジェクト SESC ポンペイアの依頼を受け、古い工場を公共のスポーツ文化センターにリノベーションする。
- 1986 バイーア州サルヴァドールの旧市街の修復プロジェクトがスタート。
- 1990 サンパウロのシティ・ホールの設計がスタート。
- 1992 シティ・ホールの改築の途中、自邸にて生涯を閉じる。



リナ・ボ・バルディ、ガラスの家にて



深いところでは、
私は建築を詩のような集会的な事業としてとらえています。
リナ・ボ・バルディ

植物の壁のドローイング、シティホール(サンパウロ)